

いまと、
これから。

鳥取 駅
TOTTORI STATION

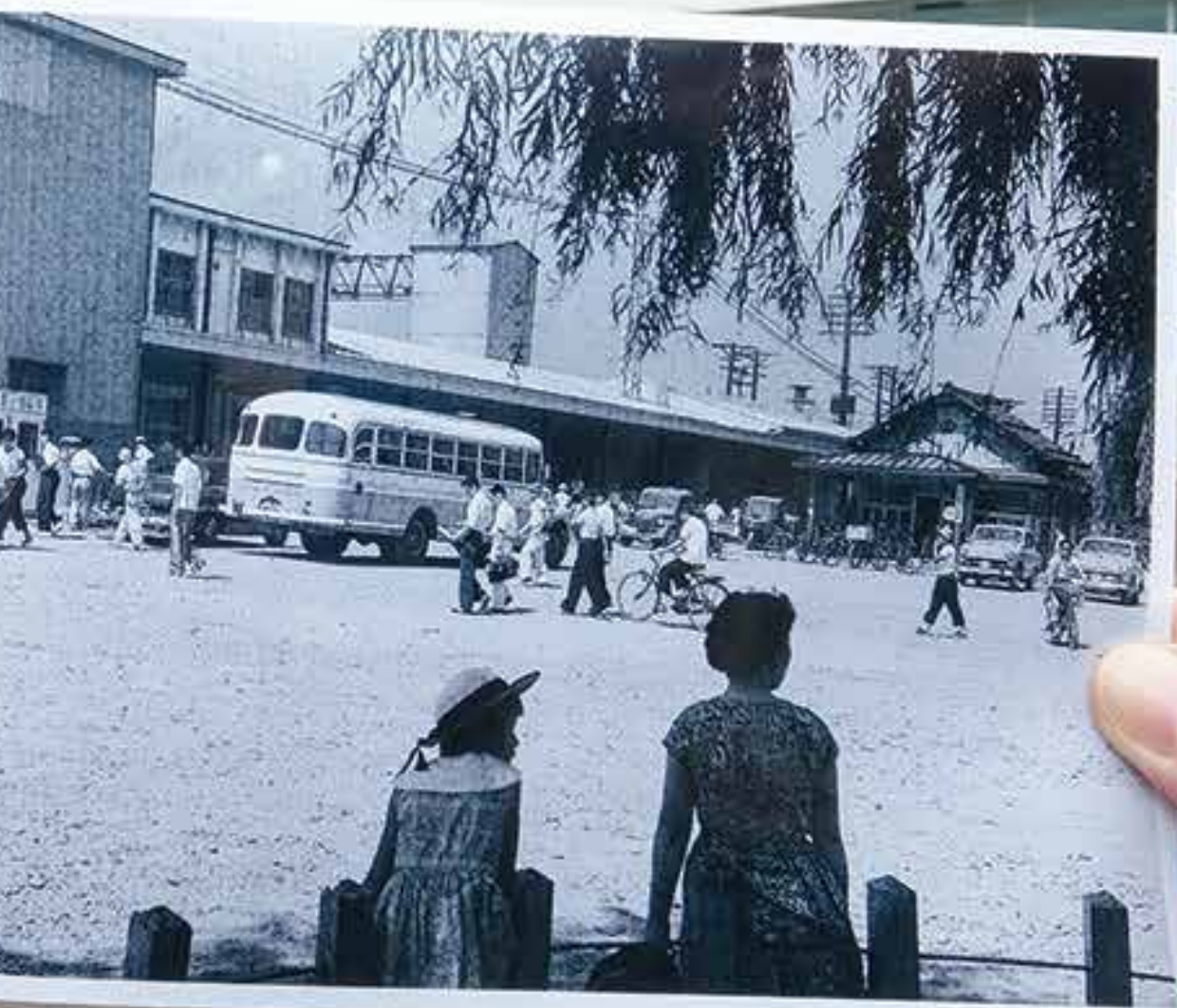
いまとこれから
のとのりの
ための
ボランティア・
地域づくり・
NPOを考える
情報誌

「特集」

ここにあったことを、
なかったことにしない。



取 駅
OTTORI STATION



時間というのは普段は約束の時間とかご飯の時間とか途中においた期限を気にするぐらいだけれど、時にその積み重なりで驚かされることもある。親戚の子どもと久しぶりに会って小さかった身長が自分と変わらないぐらいになっていて驚くとか、同級生と思ひ出話をしていて、卒業からそんなに経ったと驚くとか。

人の記憶はあいまいで、いつも通っていた道沿いの建物が急になくなって更地になるとそこに何があったか思い出せなかったりする。でも、昔の写真を引っ張り出してきて、「そうか美容院があったんだ」「あの子があそこで初めて髪を染めたよね」とか話しているときぐんぐんと記憶が鮮明になってきて、その時、そこに流れていた時間を思い出せたりする。その時にパアツと広がる「懐かしい」とい

に変わることもあるけれど、嬉しい事実じゃなくてもそのことをそのまま残すべきものもある。失敗や後悔も今の自分を構成する大切な記憶で、同じように個人を越えてまじにとつて大切な記憶としての事実もある。

例えば、大きな災害が起きた時に過去にあった災害のこと、その時に昔そこで暮らした人が残した記録が目ざれることがある。「ここまで被害があった」と過去に学べばわかったのだ。でも、写真があるだけでは今、生きている人の記憶にはなりにくい。観て、話して、それはあらたに記憶になっていく。同じ過ちを犯さないために、かけがえない「まちの記憶」を失わないために。

今回の特集では現役世代が地域の先輩に聴いた話の記録です。いまと、これからのためのこれ

いまと、 これから。 CONTENTS

【特集】

- 宮川さんから山本さんへ。 4
- さじ民話会から鷺見さんへ。 7
- 高多さんから円谷さんへ。 10

【ミニコラム】

- ・今日も、つまみぐい。 13
- ・いま、これ、ぶつく。 13

【高校生 ing】

- ・ボランティアという学び 14



※モノクロ写真協力：鳥取県立公文書館（同館所蔵）

[特 集]

ここにあったことを、
なかったことにしない。

う感情はなんだかとても幸せだったりもする。記憶は時間が経つと辛かった思い出も「懐かしさ」

まで積み重ねられた時間から紡がれるお話。ここにあったことを、なかったことにしないために。

戦争はいいとか悪いとか全くないけな。絶対どがなことがあっても阻止せないけん。

これに、投稿しとるのに。（鳥取県原爆被害者協議会被爆70周年記念事「被爆体験文集 原爆と地獄」を見せてくれる。）みんなが、その時の体験談書いとる。俺は小説家でもなんでもない。悲惨な姿をね、文筆であらわすことは、ようせんつちゆうてな。（文章を見ると当時の広島を「なんともいえん光景」と表されている。）そりや、書けるもんじゃないけな。書いとんなる人もあるけどな、そうすると日記みたいになっちゃうだがな。そのままの姿を、描写っていうものを、そりや小説家じゃないしね、心理学者でもない。原爆で、跡形もなくとろけちゃつとるけど。頭の中では出てくるけど、その事実をよう表さんし、話をな、しても、ようでせん。ありや地獄だ。

脳されとつたがな。だから自分らもお国のためだつて言われたら13、14で学徒動員でな、毎日食うや食わずで空襲にあつて海軍工廠行つて、軍艦を作つたり直したりの手助けをして。もう日本国中がそういう時代だつた。で少々不都合があつてもみんな耐えとつた。鬼畜米英だつて。アメリカとイギリス、鬼畜だつて。鬼の畜生。そういう洗脳だんな。それで、敗戦とかなんとかそうなつたら、撤退だ。逃げることを、後に進むだつて。そういうことを教育して。終戦後は学校に通つてもな、本もない。悪いところは全部黒で消しちゃつとるでしょ、間違つとることを教育したり、そういうやなことを平気で。そういう時代だつた。まあほんとねえ、地獄、地獄みたいなことはないけど、地獄以上の地獄だ。

普通の戦争はな、赤紙で招集させるつていうのが仮にあつても戦つてすぐに帰してもらつとつた。ところがすぐに

山本さんへ。

「戦争を体験した世代」という呼び方がある。昭和から平成、そして令和となり、「戦争を体験していない世代」が多数となった今、戦争の本当の怖さをどう理解したらいいんだろう。山本さんは戦争体験を語り継ぐ活動をされている宮川さんを訪ねてお話を聞きました。

聴き手

山本 明仁（やまもと あきひと）

湯梨浜町在住。ゲストハウスヘルパー。

満州の方に送ったり東南アジアにどんな進駐するようになって。うちの近所でも農家でも一番優秀だった跡取りさんがね、本当に優秀な人たちは全部、兵隊に引つ張られちゃって。みんな戦死して帰って来なかった。調べてみるとな、みんな満州だシナだビルマだどこだってな、行かされて。本当に戦争の厳しさ、なんとも言われん。

好きあって、結婚して、結婚したあくる日に招集して、帰って来んで。それで兄貴が亡くなったけその弟さんと残された兄貴の奥さんと結婚して、ちやなんがうちの近所でも何組もあったよ。そういうね、なんともかんとも言われん時代。それから水兵さんは、船の整備で上陸するとき休暇があるんだな。その期間なんかは、もう二度と帰れんかもしれんけえって遊郭に連れて行かれて。そういうことを平然とする時代だっただけえ。

鉄の玉、鉄砲の玉の代わりだっただけえ、人間は。もう戦争っちゅうのは

大義名分なものもありやへん。
(宮川さんは、戦争に関する書籍、資料、新聞記事などを出して説明してくれた。)

こうやってな、記録を残しとる。その当時はなんとも言われん、もう毎日毎日空襲にあつたり、呉なんかは一番最初の空襲のときに自分らが入ったつた寮が全部焼け出されて、持ってた荷物焼かれちゃった。記録だけは大事にして、みんな切って参考までに残してく。こういうやな資料があるけえ忘れることもないし、ばらばらと見て思ひ出す。戦争はいいとか悪いとか全くないけな。絶対どがなことがあつても阻止せないけん。原爆で一発ばつんやつたら終わつちゃうだけえな。戦争は絶対をやつたらいいけん。

これまでは俺のちよつと上の世代、戦地に行った人らが体験を語つとつた。被爆者の会も今は200人くらい、病氣やなんだつて今動けとるのは20、30人ぐらいかな。もう語れる人がお

宮川さんから

宮川 宗隆 (みやがわ むねたか)

現在 91 歳。当時 14 歳で学徒動員により広島県呉市の海軍工廠へ。1945 年 8 月 6 日、原爆が落とされた日は、窓ガラスが割れるほどの爆風が呉市を襲った。情報も交通網も遮断され、混乱した状況を察知した宮川さんは、同僚とともに広島へと向かい、原爆が投下された街の光景を目の当たりにする。現在は「鳥取県原爆被害者協議会」に所属し、次世代へつなぐために戦争体験を語り継ぐ活動をしている。



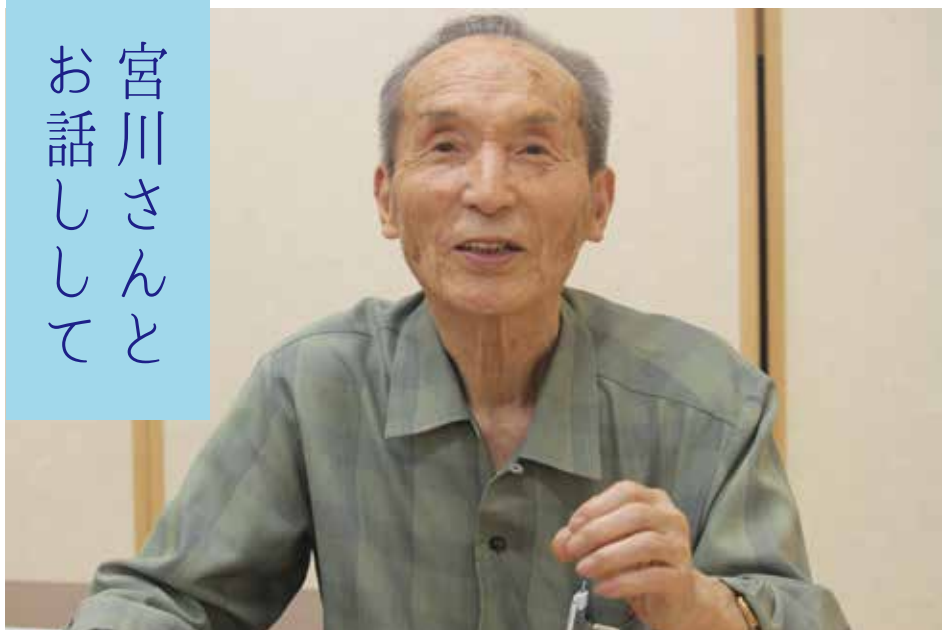
間違つとることを教
育したり、そういう
やなことを平気で。
そういう時代だった。

らんくなる。後世に残さないけれど、なんで戦争が起こったか、戦争がどんなもんだったか、こうやって資料集めて勉強してな。色んな所で戦争のことを話すようにしとる。

誰かの受け売りでなしに、自分が実際に談して取材しとる人の記事とか、そういう人の記録とかなんとかっていうのは大事にしてな、みんな読んどくだ。切り抜いたりとかね。そういう勉強の仕方しとるとな、違う環境におる違う人間でもな、話聞いても、何が正しいかっていうことが、一番大事なことが分かるようになってくる。

しつかりせんと、ほんとおかしい国に変わリよる。自国主義でよそのこと全然考えんてしよ。指導者をね、ちゃんとした正しい道をする人を選んでおかんと、大変な国になっちゃう。他人事じゃないってこと、よく勉強しとかないけんよ。

宮川さんとお話して



今度は、宮川さんからお話を聞いた山本さんに「どう感じたのか。」「どう考えたのか。」を聞いてみました。



宮川さんの、柔和な雰囲気や、ジョークを織り交ぜる話し方は、聞いている人の心を開くカギでした。だからこそ、戦争のことを話されたときの目を見ると、その情景を見た、当時14歳だった宮川さんの感情が、映っていました。

終戦からかなりの時間が経過しているので、戦争のお話は貴重です。

ですが、同時に、現実味のない話にも聞こえます。それでもその話が、軽やかに耳に入ってきたのは、宮川さんが、近所づきあいのお話もしてくださったからかもしれません。

近所づきあいだって、仲がいいように見えても、何かしらの因縁がある。戦争もそう。そこで、自分の得や利益のために動くから、戦争（喧嘩）が起きる。

『戦争』という言葉は、重く聞こえます。ただ、それは、突き詰めると、自分たちの身近な人間関係と変わらないものだな、と感じました。

特集：ここにあったことを、なかったことにしない。

さじ民話会から 鷺見さんへ。

倉吉から、くねくねカーブとアップダウンが続く山道を車で走り、私達は取材の為「民話の里佐治町」へと向かった。

鳥取市佐治総合支所へ着くと、お話を聞く為の場所へと案内された。透明で水量豊かな清流の川にかかる橋を渡ると、その場所、佐治谷ばなしが生まれた時代の村の暮らしをそっくりそのまま保存再生した、茅葺屋根の日本家屋だった。

玄関を入ると土間で、紙漉きの為の大きな釜があり、右手には牛や馬の小屋。左手に広がる座敷に上がると、二人の作務衣姿の女性の語り部さんが囲炉裏に木をくべながら待って下さっていた。

聴き手
鷺見 春佳（すみ はるか）
倉吉市在住。絵本製作。



さじ民話会（写真左：谷口富美子、写真右：岡村絹江）

1998年発足。「佐治谷ばなし」の保存・伝承のための活動として、会員が佐治町内の民話の館を拠点に定期的に公演をするほか、県内外から招待されて各地で公演を行っています。また佐治小学校に出向き、小学生が佐治谷ばなしを覚えるお手伝いをしています。2004年には「佐治谷ばなし」が無形民俗文化財（鳥取市）に指定されました。

私たちも文化財になってるん

驚見 佐治谷ばなしはいつからあるのでしょうか？

岡村 口から口へ伝えていく話です。で、おじいさんやおばあさんに聞いたものをまた自分達の孫などに語り伝えてきたのが佐治谷ばなしの流れです。古文書を研究された方によると、400年ぐらい前に池田藩の殿様達が鳥取に江戸話的に持ち込んだものじゃないかと。

谷口 お寺の和尚さんが修行のために、佐治に入られる。それから行商の方、昔はあきんどさんっていいですね、そういう方が佐治に売り物を持って入り込まれて、民間の家に宿を取られて、家の家族に話を聞いてもらったものが根付いたんじゃないでしょうか。

岡村 お寺の和尚さんがいろんな説法をされるときに、難しい話を

したんでは村のみんなには分からないので、分かりやすく、佐治谷ばなしみたいなことを話して聞かせて。必ず佐治谷ばなしの終わりに、

「だけえな、そげなことをすると、人に笑われるだで」とか「だけえな、知ったかぶりするもんじゃないだで」とか、孫や子どもたちに教訓として一言付け加えるようにしてますのでね。そういう風に、和尚さんもおもしろおかしくお話ししたあとに、一言最後に付け加えとるじゃないかと

か、いろんな説があります。どれが本当か分かりません。

岡村 子どもの時はおばあさんからかな？ 佐治の人は佐治谷ばなしはそんなには知らないと思います。

谷口 私も生の声では聞いていないです。少し前の時代、佐治谷ばなしへの偏見がありまして。「佐治谷

のあほう話」って「あほう」がついてたんです。親の代もそれを卑下して、地域では話してなかったんですよ。そういう雰囲気があるかもしれない。年配の方はこの佐治谷ばなしが受け入れにくいという方もおられると思いますね。

岡村 50年くらい前かな、教育委員会の中島嘉吉さんという方が、佐治中歩いてお年寄りに聞いて採話されて本にされたんです。78話残っています。そうしたら、佐治村民からクレームがきましてね。「なんしに佐治谷ばなしが無くなりかけよるのを、今更集めて本にすると

はなんたることか」って村民と議会からお叱りを受けて。佐治谷ばなしを話すのはタブーとしてしまわれたんです。それから平成10年に鳥取県が全国国民文化祭の開催地に

なりまして、佐治は何を取り上げたらいいだろうかって委員会が開かれて。ちょうどそのころに、テレビでやってた日本昔話のナレーターが佐治に來られて佐治谷ばなしの5話がCD化されました。そういう民話ブームもあって、佐治は民話を取り上げようということになりました。

岡村 全国から有名な語り部さんを集めて語り部の会をしたら、どつと火がついてマスコミにも取り上げられるようになって。まあ暗黙の了解で話してもいいじゃないかって。

谷口 平成16年ですかね。鳥取市の無形民俗文化財に指定されてるんです。

岡村 語りを無形文化財に取り上げるのは初めてでして、全国でもこの無形文化財で話が指定されとるのはこの佐治谷ばなしだけです。

かはみんな、語ったらいけん話はせんほうがいいんじゃないかっていうんで、やめてしまわれて。本来はどこにでもあったお話です。

谷口 早とちりとか、人の真似とかね。それを面白おかしく作ったお話がね。

岡村 人間がだれでもする失敗をおもしろおかしく話にしますのですね。どこにもある話です。でも佐治以外では、佐治のものが失敗した、あほうやだらずが佐治に

だでって言って優越感に浸るだけの話がずっと広まってるんです。けど佐治は無形文化財にもなってるし、正しく後世に伝えたいし残していきたいっていうんで、一言最後に教訓として「だけえな」ってことを一言加えて「そげんことをしたらいいけんだで」っていうことを必ず

だから、 伝承していきたい。

お話の後につけるようにしています。

谷口 私が気になりましたのが、小学校で子どもさんに民話を聞かせることが、授業として押し付けてないかなってことです。そしたらそれはまったく無い。本当にその学校から、話を求めとられるって言われたのがすごくうれしくて。

岡村 こちらから押し付けた語りじゃないんです。依頼があって話しています。佐治小学校の5年生はこの佐治谷ばなしを必ず一人一話覚えて、ここでみんなが一人ずつ発表してもらいます。だから代々、佐治小学校卒業生は自分が覚えた佐治谷ばなしは必ず覚えてると思います。驚見 そういう風に子どもたちが話を覚えて語ることにどう思われていますか？

岡村 すごいなあ、もう万歳という感じ。長い話も覚えているしね。中でも年に一人か二人すばらしい語りをされるお子さんがいます。民話会お手上げなほどです。

谷口 本で覚えて発表されるけど、本で覚えるとやっぱり標準語で締めくくられる。その原本を、この岡村さんが何話か本当の佐治弁で語り口調に直して学校に渡されたりねえ。とても努力してくれています。岡村 語りやすいように語り部の語り口調にね。「言いました」「です」「ます」じゃあちよつと語りになりますのでね。

谷口 私たちも大切に伝承していきたいと思っています。押し付けじゃなくて、自然に若い方から差別を抜きにして取り入れてくれているというのがありがたいですね。

驚見 お話をされるときはどんな気持ちですか。

谷口 このお話の面白いところを聞いてもらいたい、感じてもらいたい、人権的なところも感じてもらいたい、単純に言えば話の内容が把握できるように聞いていただきたい。大人の方はもう方言的にも差別的も人権的な部分も、ある程度は感じながら聞いてくださるのかなと思ってね。とにかく話の内容をおりかえしてもらえるのが一番ですね。

岡村 聞いてくださる人が、あはは、とかくすくすくすつとか、あー面白かった今日はいい話聞かせてもらったわいって言うていただいたら、それが一番うれしいです。話を楽しく聞いていただくということが一番です。

谷口 十人おれば十人が同じ話を

しても、それぞれのお話になると思います。上手下手ではない、ただ個性の語り口。語る人によって話も少しずつ雰囲気が変わるから、直接聞かれると面白いと思いますよ。多分それでいいんじゃないかなと思っています。

さじ民話会さん

とお話して

お話を伺って、
どう感じられたかを驚見さんに
聞いてみました。



佐治谷ばなしは、空想の作り話ではなく、実際にあった人間模様を語ったお話が多い。悔しかったり、恥をかいたりといった、現代にも通

じる人間の喜怒哀楽を、ユーモアでふんわり包みながら、温かな佐治のことで語っている。

自然環境が厳しく、物も情報もあまり無い時代。語りは娯楽として、大衆芸術として、和みの場として、時には教育として、人と文化を育みながら発展した。囲炉裏を囲んで皆で語り合うのは、長く寒い冬を元気に乗り切る為には欠かせず事のできないものだっただろう。民話を披露して下さった語り部のお母さんの元氣な笑顔が印象的だった。

今や、物も情報も過多でスピーディな時代だからこそ、火を囲んで語り合うようなシンプルで普遍的な安心感を心の中で私はいつも求めているような気がする。そんな作品を私も作りたいなと思った。





円谷さんへ。

聴き手

円谷 禅（えんや ゆずる）

倉吉ブックセンター店主（ディレクター）。

半世紀以上にわたり様々な市民活動や文化活動に携わってこられた高多彬臣さんに、その中での葛藤とこれからの若い人たちに伝えたいことを聞きました。

高多 私人が市民活動やボランティア活動に関心を持ったきっかけは戦争体験です。といっても直接戦争には行っていない。私は上皇と同じ1933年に生まれました。この年はヒトラーが政権を取った年でもあります。満州事変、日中戦争、太平洋戦争と、ずっと戦争の中で生きてきました。それが突然終戦を迎え、呆然とするわけです。精神的な空白なんです。今まで教えられてきたことが、そうではなかった。なぜこのような戦争になったのかと苦悩しました。それから、天皇絶対の愛国主義に変わる自分の座標軸は何かと必死に探し本を読みました。ヨーロッパの人権思想は当時の日本にはなかったものですから、どうして市民革命が起こって、どのように人権思想が生まれたかということに関心を持ち、大学で西洋史を学びました。革命は必ずしもいいことじゃない、でも、古い社会を壊していかなければならない。そこで、共同体と人格の尊重を主張するエマニュエル・ムーニーに出会い、研究するに至りました。

教員になって、最初は平和教育をやるうと思いましたが、問題がありました。政治的な主題を扱うことと、政党

的・党派的・イデオロギー的な教育をするということは別問題にも関わらず平和教育が白眼視されました。赤十字は党派を超えていますから、ヒューマニティという観点で戦争反対だということにすれば、異論はないはず。そこで私はJRC（青少年赤十字）のボランティア活動を始めました。高校生と共に倉吉の皆成学園を訪問し子どもたちと野球をしたり、外国人留学生とともに小さな共同体を作ったり、こんな風に十年間ほど活動しました。しかし、教員がJRCのような市民活動や平和活動を行うことに対して、教育委員会がよく思わなかったんですね。私がJRCの活動をしていると、学校教育外のことだと熱心だと勤務評定は下がるといいます。

教員として多くの保護者とも一緒に過ごしましたが、部落外の人が同和地区の人に会って、「自分と同じ」ことに驚いたという場面もあり、差別観の根深さを感じました。同和教育も国際教育も、人をカテゴライズし先入観を持たないで、ひとりの人間として出会い橋をかけること。そのような活動をやっていくことが教育であり、市民活動だと思っています。また、高齢者が経験の保持者として語り、若い人たちが今に生かす。年寄りや若い世代の架け橋が市民活動の幅を広げるんじゃないかな。

円谷 鳥取県立図書館ではどのようなことを考えられたのでしょうか。

高多 私は学校現場を去るのは寂し

高多さんから

高多 彬臣（たかた よしとみ）

1933 年（昭和 8 年）鳥取県倉吉市に生まれる。

京都大学文学部（西洋史専攻）卒。倉吉西高等学校長、
鳥取県立図書館長、鳥取短期大学教員を務める。その後、
鳥取県日仏友好協会長、鳥取県図書館協会会長などを歴任。

Association des amis d'Emmanuel Mounier 会員。

著書に『秋の手紙』『エマニュエル・ムーニエ、生涯と思想』
『真理がわれらを自由にする』

編著に『目で見える倉吉・東伯の 100 年』などがある。



かったけれども、本と一緒にになれるのは嬉しかったです。本が好きでしたからね。図書館は、本と人、人と人が出会う広場であると思っています。それらの出会いによって、コミュニティに共通の意識が出来ます。コミュニティというのは、感覚や問題を共有しなければできないんですね。そうでなければ、ばらばらに人が住んでいるだけです。地域づくりなどの市民活動に關してお話すると、これらの活動と学ぶということは一体なんですね。活動しながら学ぶ、学んで気づいたことを活かす。こうして生きた知識を活用するために図書館がある。こういう風に思っています。

もう一つは、図書館は単なる建物でなく情報コミュニケーションネットワークの一つのシステムであると考えていましたので、全県ネットワークを作るということで、後に県教育委員のときに県立学校に学校司書を必ず置くということをしました。人はとても大事です。円谷 倉吉市民として、まちのアイデンティティというものが気になります。倉吉の文化を考えていく際にも、昔を知る事が大事だと。倉吉はかつて、とても賑わっていた時代があると聞いているのですが。

高多 私の家は代々商売人で、海産問屋や肥料屋をしていました。倉吉は農工商一体都市だったんです。例えば幕末から明治あるいは大正にかけて倉吉の経済を支えたのは周辺の農村の購買

力でした。その農村の購買力を生み出したものは米と養蚕です。いい桑が育つからいい蚕になって、いい絹糸になるんですね。倉吉には製糸場もありました。うちのおばあさんもそこで働いていました。倉吉の絹糸は非常に評価が高くて、パリ万博の際に賞牌をもらっているんです。米の代金が入ったときと、蚕の売れた代金が入ったときは、農家に現金が入る。そのときに倉吉の商売人がいっぱい商品売を売る。そういう具合に倉吉の商売は周辺の農業によって支えられていました。

円谷 これから未来に倉吉というまちはどういう風に変化していくのか、今はその部分が見えないです。

高多 倉吉の中心産業は変化してきました。物の生産では、地球という限界がある以上右肩上がりの経済成長は望めません。どこに我々のクリエイティビティを発揮していくべきでしょうか。所有する文化から関係の豊かさの文化へ移行しなければいけないでしょう。シェアする豊かさとも言えると思います。また、そのためにはお互いをリスペクトする教育が必要だと思います。そうして、我々の日常から世界に繋がっていく、そういう活動をしていくことになるでしょう。

それから、地域を知らなければ地域の活性化はできません。高齢者が経験の保持者として例えば戦争の悲惨さや祭りや行事、自分たちがやりたかったけどできなかったこと、それらを語るこ



とによって、若い人たちにつなぎ、今に生かしてほしいと思います。若い人たちと語り合いたいのです。「いままでと、いま、これから。」です。

円谷 私たちは平和のためになにができるでしょうか。

高多 私は柳宗悦という人に関心があって著作を読んだりしているのですが、彼の民芸運動の本質はヒューマニティでした。彼が民衆が作り出した工芸品に興味を抱いたきっかけになった一つが朝鮮の白磁であり、朝鮮の人たちの作り出した文化、アーティストたちへの敬意がありました。（民芸―民衆の工芸という言葉は柳さんにはじまります）ところが関東大震災のときに、デマで朝鮮の人たちがたくさん殺されたでしょう。そのとき柳さんは雑誌や新聞に「朝鮮人を虐殺し酷いことをした。日本人として恥ずかしい。」ということを書いていきます。これは政治的なものではなくヒューマニストとしての発言であり、朝鮮の人と文化に対する敬意なんです。

この発言で柳さんは非難されましたが、決して後退しませんでした。その時にね、自分も攻撃されることを恐れて「私は一緒に行動できないよ」といって下がってしまうのか、「あなたが戦うなら私も一緒に戦うよ。みなさんもうですか、ご一緒に」といって皆に呼びかけるか。その連帯が大切です。

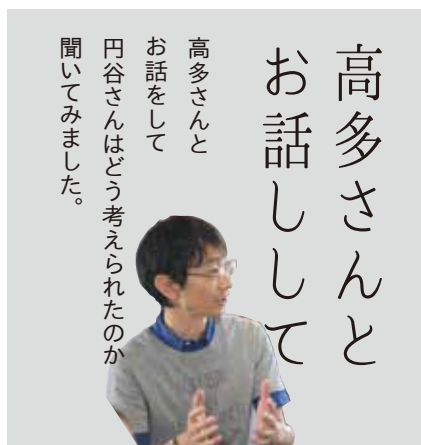
文化の多様性とは我々の豊かさなんです。多様性が豊かなものとして発動する為にはその多様性を生み出す様な人に対するリスペクトが大切だと思います。

高多さんとお話して

高多さんとお話をして

円谷さんはどう考えられたのか聞いてみました。

高多さんとお話をして



今年の春、伯母が他界した。享年八十五歳。伯母とは世代も経験のベクトルも大きく異なるのだが、不思議と馬が合うので、会話がつきることはなかった。お互い「今」感じていることを同じ目線で見て、感覚を共有することを自然に楽しめていたように思う。自分と異なる感覚を認め合うためには、まず、相手へのリスペクトが必要となる。

「同じ目線で見て、感覚を共有する」というのは、自分にはない多様性を認めることにも繋がっている。そして、互いの多様性を認め合うプロセスこそが本当の豊かさへと繋がる道ではないのか。

今回の対談を終えて、高多先生のお話から僕が一番感じたのはそういうことなのかも知れない。まずは出来る範囲で、自分を「豊か」にするところから始めたい。

多様性が豊かなものとして発動する為には
その多様性を生み出す様な人に対する
リスペクトが大切だと思います。



今日も つまみじい。

その9

「佐治町の梨あめ」の巻。

鳥取県の秋の果物と言えば、梨！ そのまま頂くのも良いですが、タイトル通りつまんで食べるなら小さいサイズがお手頃かな。と言うわけで、今回は鳥取市佐治町の梨あめをつまみ食い。お話を聞かせて下さったのは、佐治町の米山節子さんです。近所の方二人で梨あめを作っておられます。梨あめは、飴玉みたいに丸くてソフトキャンディーくらいの柔らかさで、口に入れるともっと柔らかくなります。そして梨特有のざらざら感。原材料はいたってシンプルで、梨、グラニュー糖、片栗粉の三つだけ。もともと梨農家なので、規格外の梨で飴やジャムを作るのだとか。皮をむいてミキサーにかけた梨を蒸気鍋で約2時間、焦げないように木べらで混ぜながら煮詰めます。正味10キロをなんと3キロにまで煮詰めるといふからこれは大変な作業

です。でもこの時の混ぜ方が腕の見せ所だそうです。『ただここにマメができますよ、こうやって』開いた手のひらには年季の入ったマメがありました。この混ぜる過程で綺麗な飴色が出せたら成功！ 後は鍋から出して冷めないうちに片栗粉をまぶしたまな板の上で棒状に転がしたら、それを切って丸めて飴玉状にして完成です。「家族にはよく飴湯にしてあげていたの」と言ってお教えてくださったのは、お湯に5粒ほどの梨あめを溶かしていただく梨あめの飴湯。片栗粉がちょうどどろみになって、寒い時期にいただくの癖になりそう。秋の便りを冬にいただくのもまた素敵でしょう？

節子さんたちエンゼルグループの梨あめは佐治町特産物販所「かみんぐ百彩」や「道の駅清流茶屋かわはら」で購入できます。

親族のお葬式に参列すると度々感じる感覚がある。寂しいや悲しいと共存する、何か目に見えない温かいもの。それは、家族や普段会うことが少ない親戚たちと久々に顔を合わせ、「頑固な人だったよね。」「いつだかこんな珍事件があったね。」などと故人の思い出話に花が咲く時間。

大阪人ということも相まって、ボケやツツコミ交じりにそんな話をしていたら、涙より

笑いが多くなったりすることもしばしば。すると頭の片隅で、自分はどんな風に歳を重ねるのだろうか？というのと同時に、逆に自分の先祖はどんな生き方をしてきたのだろうか？なんてことをふと想像したりする。想像するだけで調べないのだけれど。

この絵本は、そんなことをふと思ふ大人の心をもくすぐる一冊だ。想像し得ないような過去から引き継がれて

来た『自分』。今の自分は過去のさらにずっとと過去が積み重なってできてきたもので、自分はその線状の一番末来に近い点になっているのだと考えるとなんと不思議で面白い。そして、その不思議で面白いことをこんなにも短い文章と絵で表現できるこの絵本もまた魅力的だ。

渡邊 舞
えほんカフェmomo
店主



Now, this, books

おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん

著者：長谷川 義史
出版社：BL 出版 (2000/7/1)
ISBN-10: 4892387703
ISBN-13: 978-4892387708

高校生i唱

Vol.10

鳥取県立米子西高等学校

3年生

大和田 爽介

おおわだ そうすけ

ボランティアという学び

ボランティアは今回が初めてという大和田さんに今年の夏休みに行ったボランティア活動についてお話を伺いました。

今回ボランティアを行おうと思ったきっかけはなんですか？

今回とつとり県民活動活性化センターが主催する「ボランティア体験事業」に参加するまで、ボランティア活動をしたことはありませんでした。無償で人のために何かをするというのは、自分には絶対出来ないなと思っていました。他人のために何かするなら自分のために時間を使いたいなと思っていましたし、今回ボランティアをしたのも、正直に言うとうと大学推薦で使うためでした。

2年の途中まではバスケットボール部に所属していました。仲の良かった友人が退部するということで、自分も受験などのこともあり一緒に退部することになりました。ただ、その後は結局3年生になるまで、何も考えていなくて、3年生になって改めて自分のやりたいことを見つけて、そこから大学を調べたり、受験に向けて再度準備を始めました。

どのような活動を行ったのですか？

今回ボランティア体験でお世話になったのは米作りなどを通して子ども達へ自然体験の機会を提供している「楽笑本舗（らくしょうほんぼ・米子市）」という団体です。今回僕たちは、ボランティアスタッフとして、かかし製作のワークショップを行うことになっていました。企画段階から自分達で考えて、それを当日地域の方々に講師役として教えるというものです。他校の学生4人とチームを組んで、準備を進めていきました。

活動を終えて、何かご自身に変化などはありましたか？

今回の体験ではいくつかの学び、気づきがありました。まず1つが「他人に教える」ということが思っていた以上に難しかったです。自分自身は完璧に理解していても、それを相手に伝えようとすると、伝わらないということが多いです。そこで、言い方を代えたり、話す内容を少し前の部分に戻って、

再度そこから話をしたりと工夫しながら伝えるようにしていました。

このおかげでボランティア活動が終わってから学校で友達に勉強を教えていると、「なるほど」と理解してもらえることが増えてきました。やっぱりこの時の経験が活きているのかなと思っています。

また、チームの中でリーダーの役割を担うことになりました。初めての体験だったのでここでも学びがありました。チームの他のメンバーは主観的な発言をすることが多かったのですが、リーダーまで主観的な意見だけではチームはまとまらないので、客観的な意見や態度を取らないといけなかったなと思いました。途中で気づいて心掛けようと思ったのですがなかなか上手くいかず、活動が終わってしまい少し後悔しています。

ボランティアについては、初めにお話ししたように今まで全く関心がなかったです。でも今回の体験を通して様々な学びを得られたことでボランティアに対しての抵抗感は和らぎました。これからも興味のある活動だったらしめてみようと思えるようになりました。



編集後記

大学受験や就職など将来に対する不安を抱きながらも、授業を休んで安保闘争のデモに参加する高校生たちの真摯な姿が、哲学者古在由重の『思想とはなにか』（岩波新書）の冒頭に、「思想」とは何かという問いと切り結びながら描かれている。出版は私が生まれた1960年。1979年大学に入学したばかりの私にとって生き方の転換点になった本の1冊だ。

それから40年。氏がこの本を書いた59歳になった今の私が、これから「継いでいきたい」とあらためて思うことは、「Z世代」と言われる1990年代後半以降に生まれた若者たちから学ぶこと。

毛利 葉



いまとこれからのとつとりのためのボランティア・地域づくり・NPOを考える情報誌

「いまと、これから。」 2019年12月20日発行（第12号）

発行：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター

発行人：齋藤明彦 編集人：毛利葉

取材・編集：池淵菜美、上山梓、谷祐基、足立みぎわ、世瀬あけみ、尾崎可愛、円谷禅、鷺見春佳、山本明仁、三村雅貴、三宅由紀子

写真：藤田和俊、山本明仁 撮影協力：坂本桃子、谷内口瑞月 モノクロ写真提供：鳥取県立公文書館（所蔵） デザイン：石原達也

お問合せ：公益財団法人 とっとり県民活動活性化センター URL <http://tottori-katsu.net/>

〒682-0023 倉吉市山根 557-1 パープルタウン 2 階 TEL 0858-24-6460 FAX 0858-24-6470 E-mail info@tottori-katsu.net



読者アンケート
にご協力く
ださい。



「いまこれ」
バックナン
バーはこち
から。